

# ドストエフスキイにおける < の 概念について

松 本 賢 一

## 1. 「民衆」の発見

1854年の1月30日から2月22日にかけて、ドストエフスキイは兄ミハイルに宛てて長い手紙を書いている。ペトラシェフスキイ事件で逮捕され、オムスクの要塞監獄で4年の徒刑を終えたドストエフスキイが、出獄するにあたって認めたおよそ4年ぶりの兄への手紙であった。

この長い書簡の中で、ドストエフスキイは自分が監獄で知った二つの相反する囚人像を兄に伝えている。そのひとつは、ドストエフスキイ自身も属している貴族階級への憎悪を隠そうとしない、復讐的な人々の姿である。

(・・・)僕は既にトボリスクで徒刑囚たちと知り合いになっていたのですが、ここオムスクでは彼らと4年間を共に過ごすことになりました。これは粗野で苛々していて恨みをのんだ人々です。貴族に対する彼らの憎悪は度外れなもので、それゆえ、彼らはわれわれ貴族を敵意をもって迎え、われわれの苦難には意地の悪い喜びを感じていたのです。もしも許されれば、彼らはわれわれを食い殺したことでしょう。しかし、考えてもみてください。こういった人々とともに数年の間暮らし、飲み食いしたり眠ったりしなければならず、あらん限りの数限りない侮辱に対して不平を鳴らす暇とて無いとなれば、どれほどの保護が望めたでしょうか。「あんたら貴族は鉄の嘴さ、俺たちをつつき殺したじゃないか。前は旦那様で、民衆を苦しめていたが、今はそれ以下になって、俺たちの兄弟分じゃないか」これが4年のあいだ奏で

られたテーマなのです。150人の敵たちは迫害に倦むことがありませんでした。彼らにはこれが楽しく、気散じで、仕事なのです。こういった悲運から逃れ得たとすれば、それは冷淡さによって、彼らが認めざるを得ない精神的優越によって、そして彼らの意志に従わぬ態度によってでした。彼らは常にわれわれが彼らよりも高い位置にあることを意識していました。われわれの犯罪については、彼らは何も分かってはいませんでした。われわれの方でもこのことについては口を閉ざしていましたが、それゆえ相互に理解することが出来ず、われわれは、彼らがそれによって生き、また呼吸している、貴族階級に対するあらゆる復讐と迫害に耐えねばならなかったのです。(・・・) <28-1-169~170><sup>1</sup>

このような囚人たちは、やがて『罪と罰』(1866)の「エピローグ」において、「旦那」でありながら「百姓のように」強盗殺人を犯したラスコーリニコフを取り囲むことになるが<sup>2</sup>、その時のラスコーリニコフと同様に、ドストエフスキイは「冷淡さ」と「精神的優越」によって彼らの「貴族階級に対するあらゆる復讐と迫害」から逃れていたことがわかる。囚人たちはドストエフスキイがユートピア社会主義への熱中の廉で、そして専制と農奴制を告発したベリンスキイの書簡を朗読した廉で監獄にいることを知らず、ドストエフスキイもまた語ろうとはしない。ここで描かれているのは、ドストエフスキイも含めたペトラシェフスキイ・グループの若者たちが、その解放・救済を企図した人々と貴族階級との埋め難い溝であり、民衆の只中にあるときの貴族の強い疎外感であるといえる。

ところがこの書簡の終わり近くになると、ドストエフスキイの口からは異なった囚人の姿が語られることになる。

(・・・)とはいえ、人はどこでも人です。監獄でも、僕は強盗たちの中に4年かかってやっと人間を見出したのです。信じてもらえるでしょうか、深く、強く、素晴らしいタイプがいるのです。粗野な殻の下に黄金を探し出すことはなんと楽しかったことでしょう。それも

一つや二つではなく、いくつもあるのです。ある者は尊敬せざるを得ませんし、またある者は文句無しに素晴らしいのです。僕はあるチェルケス人に（彼は強盗の廉で懲役になったのです）ロシア語と読み書きを教えました。どれほどの感謝の念で彼が僕を遇してくれたことか！また別の流刑囚は僕と別れる時に泣き出してしまいました。僕は彼に金をやったことがあります、たいした額ではありません。でもそれに対する彼の感謝は限りないものでした。（・・・）ついでに言えば、僕は監獄からどれほど多くの民衆のタイプ（ ）を、性格を取り出したことでしょうか！僕は彼らとの暮らしに馴染み、それゆえに、今は彼らをかなり知っていると思います。浮浪者や強盗の、そして総じて暗い不幸な生活の物語がどれほどあることか！数巻の本になりますよ。なんとも驚くべき人々（ ）です。全体としてみれば、僕にとって、時間は決して無駄に過ぎはしなかったのです。ロシアを、とは言わぬにせよ、ロシアの民衆（ ）を僕は良く知りました。ひょっとしたら、多くの人はいくらにも知ってはいないだろうというほどに良く。しかしこれは僕のちょっとした自負心です。度し難いというほどのものではないでしょう。（・・・）< 28 - 1 - 172 ~ 173 >

20日あまりにわたって書き続けられた書簡であることを思えば、このような相反する囚人像が述べられること自体は不思議ではなからう。そしてこの二つの囚人像のうち、どちらか一方を真実とし、他方を偽りであると決め付ける必要もまたないといえよう。4年間の沈黙を強いられたドストエフスキイの口は、性急に、未整理のまま自らの印象を兄に伝えようとしているのであり、その真率さを疑うことは出来ない。貴族である自分への悪意や迫害も真実であれば、「粗野な殻の下に黄金を」見出したこともまた真実である。しかしながら、注意しなければならないのは、「粗野な殻の下に黄金を」、「強盗」の中に「人間」を見出した時に、ドストエフスキイにとって囚人は容易に「民衆」（ ）に転化しているということである。オムスク要塞監獄の徒刑囚たちという特殊な人間集団との「暮らしに馴染」んだことをも

って「民衆を知った」と言い切ることが出来るのか、という反省はドストエフスキイにはないのである。いずれにせよ、この兄宛ての書簡の中で述べられているのは、民衆（とドストエフスキイが見なしたものは、自分も含めた貴族階級にとって思いがけず疎遠なものであったということと、その民衆の中には「尊敬せざるを得」ない、「文句無しに素晴らしい」人々がいるということの二つ　いわば二重の発見のナイーブな報告であり、以後生涯にわたってドストエフスキイを離れなかった「自分はロシアの民衆をよく知っている」という「自負心」の原点である。

約20年後、1873年12月10日付で発行された『市民』誌第50号の「作家の日記」欄で、ドストエフスキイは監獄における民衆経験を自らの「信念の更生」と関連付けて述べている。そもそも「現代の欺瞞のひとつ」と名付けられたこの時評は、ネチャーエフ事件をロシア社会における特殊例と位置付けようとするジャーナリズムへの反駁を主眼とするものであり、ネチャーエフのような人物はともかく、ネチャーエフ党には誰もがり得ることを説くために、ドストエフスキイは自分も含めたかつてのペトラシェフスキイ・グループの若者たちを引き合いに出したのであった。だが、ニコライ1世によって企まれた偽りの死刑を回想するうちに、ドストエフスキイの筆はこの時評の趣旨から微妙なぶれを見せ、監獄体験による自らの信念の更生を語り始めるのである。

（・・・）この（処刑を前にした　松本）最後の数分間にわれわれのうちのある者は（私ははっきりと知っているが）、本能的に自己の内に沈潜し、自らのやり切れない振る舞いのあれこれを後悔したかも知れない（誰もが生涯にわたって良心に秘めているような、そういったことである）。だが、自分たちが裁きを受ける理由となった行為は、そしてわれわれの精神を支配していた思想や概念は、後悔を必要とするものではなかった。それどころか、何かによってわれわれを清めてくれるもの、多くのことを許してくれる受難であるかのように、われわれには思われたのである！そのような感じは長く続いた。流刑の年月も苦しみもわれわれを挫けさせはしなかった。いやいや、何物もわ

れわれを挫けさせはしなかったし、われわれの信念も、務めを果たしているという意識によって、気持を支えてくれてはいたのである。いや、何か別のものがわれわれの見解を、信念を、心を変えてしまった（もちろん私は、その信念の変化がすでに明らかになっており、何らかの形で当事者自身によってそのことが証言されている仲間についてのみ、この発言を自らに許すものである）。この何か別のものとは、民衆とのじかの触れ合いであり、不幸を共にする中での民衆との同胞的な一体化（ ）であり、自分が民衆と同じになった、民衆と肩を並べた、民衆の最も低い段階と同一になったという考えなのである。（・・・）<21 - 133 ~ 134>

ここでは貴族階級に悪意と復讐心を抱いた囚人は想起されることもなく、自分が親しく交わった具体的な囚人の思い出が述べられることもない。4年にわたる徒刑生活の苦しみでさえ変化させ得なかった信念を変化させたものとして、「民衆とのじかの触れ合い」、「不幸を共にする中での民衆との同胞的な一体化」、「民衆と同じになった」、「肩を並べた」、「民衆の最も低い段階と同一になった」といった抽象的なフレーズが積み込むように続くだけである。言うまでもなく、徒刑の終了から20年を経たこの時点で、オムスクの要塞監獄での経験が、出獄時の兄宛ての私信と同様の語られ方をする筈もないが、それでもここでドストエフスキイが並べ立てる言葉に強いイデオロギー性が付与されていることは否定できないだろう。そしてそのイデオロギー性の源は、出獄後のドストエフスキイが、主として1860年代の初頭から掲げた土壤派（ ）の主張に求められなければならない。

とはいえ、土壤派の主張全体を検討することは本論の目的ではない。民衆との、ロシアの土壤との融合を説いた土壤派ドストエフスキイが、その「一体化」に付した「同胞的」という定語の陰に潜むものを考察することを本論は目的としている。したがって、ここでは、ドストエフスキイが雑誌「時代」<sup>ブルーミヤ</sup>を創刊するにあたって執筆した、1861年分の予約購読者を募るための広告文（執筆は1860年9月）をもとにして、土壤派の主張の中から本論の展開に必要なことだけを指摘しておくにとどめる。

ピョートル1世によるロシアの西欧化政策は教養階級を民衆から分離した<sup>3</sup>。ピョートルに追随してヨーロッパ人になろうとした教養階級は、自分たちがついにヨーロッパ人になれないことを思い知ったが、一方でロシア人もまた「最高度に独自の民族」であることを自覚した。ピョートルの改革はロシアにとって無駄な経験ではなかったのである。しかし、ピョートルの改革がその最後の段階に入った今、われわれロシア人はヨーロッパとは異なる生活形式、「わが国の土壌（ ）から、民衆の精神と民衆の原理からとった形式」を作り上げて新しい生活に入らなければならない。そのためには、ピョートルの改革以来170年間の西欧化の経験を持った教養階級が、ピョートルの改革に背を向けて「個別に、固有の、特殊で独立した生活を送ってきた」民衆と、ロシアの土壌と和解すること、いいかえれば、「文明と民衆的原理との和解」が急務である・・・<sup>4</sup>

このような土壌派の基本的な主張は、1840年代から対立を続ける西欧派とスラヴ派の主張の折衷案のように受け留められやすい。しかしながら、ドストエフスキの主張の特殊性は、一般にスラヴ派がそうみなしていたように、ピョートルの改革をロシア史上の誤謬と捉えるのではなく、ロシアがその使命を自覚するために必要な事業であったと考え、ピョートルの改革が現在その最終局面に差し掛かっている今であるからこそ、新たな「巨大な転換」が、「教養階級およびその代表者と民衆の原理との融合」がなされねばならないと説いている点にある。そして、本論を展開する上で重要なこととして、ここでは次のことを指摘しておかねばならない。すなわち、民衆的原理から、あるいはロシアの土壌から一度離反した教養階級が、西欧化の経験を経て再び民衆的原理と融合するという回帰の構図は、オムスクの要塞監獄の囚人たちと貴族である自分との間に隔絶を感じ、今度はその同じ囚人の中に「人間」を、「民衆」を見出したというドストエフスキの個人的経験を社会的なレベルにまで拡大したものだということである。

1873年12月の「作家の日記」において、自らの「信念の更生」の機縁としてドストエフスキが「民衆とのじかの触れ合い」、「不幸を共にする中で民衆との同胞的な一体化」を言い募る時、その言葉は、出獄時の兄宛ての書簡で述べられたナイーヴな民衆経験とそこから来る自負心を核としつつ、農

奴解放に代表される歴史上の転回点を迎えたロシアの未来に心を砕く土壌派のアジテーションとしての響きを持つ。そこには、自らの更生の物語（ ）を、ロシアの歴史（ ）のモデルにしようとする意志さえ読み取ることができよう。それだけではない。ドストエフスキイが「民衆との一体化」に何気なく冠した「同胞的な」（ ）という形容詞は、土壌派の主張を超えて、1870年代の、とりわけ露土戦争（1877～1878）時のドストエフスキイが陥った狭隘な汎スラヴ主義的傾向を予告的に暗示しているのである。

## 2．個と同胞愛

「兄弟」（ ）という名詞から派生した「兄弟的（兄弟の）」あるいは「同胞的（同胞の）」、また転義として「親密な」等の意味を持つ < > という形容詞は、それ自体としては何ら特別な意義を持つものではない。「不幸を共にする中での民衆との同胞的な一体化」という言い回しも、これだけを取り上げるならばそこには何の問題も孕まれていないかに見える。しかしながら、1861年「時代」誌の予約広告文で、「民衆との融合」という土壌派の旗幟を鮮明にしたドストエフスキイが、その後ほどなくして執筆した評論『冬に記す夏の印象』（1863）の中で、この < > と同根であり、小説作品の中ではほとんどといってよいほど用いることのなかった < ><sup>5</sup> という語について奇妙な執着を示していることを知るならば、「同胞的な一体化」という概念の危険性が浮かび上がって来るのである。

『冬に記す夏の印象』は、1862年6月から7月にかけて初めての西欧旅行をしたドストエフスキイが、旅行記の体裁を取りながら、西欧への幻滅を表明し、西欧の、わけてもフランスとイギリスの物欲に支配されたプチ・ブルジョア的生活の欺瞞性を幾分揶揄するような調子で批判した評論である。「ブルジョア試論」と題されたこの評論の第6章で、ドストエフスキイは、フランス革命の理念であった < liberté, égalité, fraternité >（自由、平等、同胞愛）がブルジョアの支配するフランスでは存在しないことを指摘し、特に < fraternité >（同胞愛）は本来西欧には存在しなかった原理であると断言する。彼に言わせれば西欧の本性の内にあるのは「同胞愛」の精神ではなく、「自分以外にこの世に存在するすべてのもの」に対して「我」<sup>6</sup>を対置しよう

とする「個人的原理（ ）」であった< 5 - 79 >。この指摘の後、ドストエフスキイは、西欧には欠けている「同胞愛」と「個人」もしくは「個性」（共に ）の訳語）との関係が、本来はどのようなものであるのかという話題に逸脱していき、その論調は熱を帯びていく。

（・・・）真の同胞愛（ ）においては、**我**であるところの各個人（ ）が他の一切と自分とが等質であったり同等であったりする権利について齟齬したりすべきではなく、他の一切の方が自分から、権利を求めるこの個性のもとに、この個別の**我**のもとにやってくることになっている。（・・・）それだけではない。この反逆し要求する個人が何よりもまず自分の**我**のすべてを社会への犠牲にしつつ（ ）自己の権利を要求したりなどしないばかりか、逆にそのような権利を全く無条件に社会に差し出さねばならない（・・・）」< 5 - 79、圈点部分は原文でイタリック >

西欧的個人は自己を自己以外のすべてのものに対置させ、自己と全体を同等のものとしてみなそうとする。しかし真の同胞愛的原理の中では、「個人」と「他の一切」は共に相手に歩み寄ろうとする、とドストエフスキイは言っている。そしてこの場合、ドストエフスキイの主張の重点は、「**我**」のすべてを社会への犠牲として差し出す、個人の側からの全体への歩み寄りに置かれているかに見える。そのことは、個人の犠牲を可能とする条件についての、一見非論理的な次のような主張が、この一節のすぐ後に続いていることから明らかであろう。

（・・・）すると、と諸君は言われるだろう。幸福になるためには無個性（ ）でなければならないのかね？果たして無個性の中に救いがあるのかね？と。いやいや反対だ、と私は言う。無個性であってはならぬだけでなく、まさに個性（ ）でなければならないのだ。それも現在西欧で固まってしまっているよりも、遙かに高い程度で個性でなければならないのだ。分かって頂きたいのだが、



自らの意志で、完全に意識的に、そして誰にも強いられることなく、万人のために自己のすべてを犠牲にすること、私の考えでは、これは個性の最高の発達の印であり、個性の最高の力であり、最高の自制であり、みずからの意志の最高の自由なのだ。みずから進んで万人のために命を投げ出すこと、万人のために十字架に、火刑に赴くこと、これは個性が最も強度に発達した時のみ可能なのである。個性である権利を完全に確信している強度に発達した個性は、既に何も恐れるものを持たず、自らの個性を、その個性の全体を万人に差し出す以外の用い方が出来ない。それは他の万人がまったく同様の権利を持ち幸福となることを目的としているのである。これは自然の法則である。

< 5 - 79 >

西欧的な個人の原理に対して批判的なドストエフスキイが、真の同胞愛を実現するための障害として個性そのものを否定し去るのならば、彼の説くところは極めて論理的で明晰であるといえよう。だがドストエフスキイは個性を否定するのではなく、西欧における以上に個性を発達させることが必要であり、個性が最高の段階にまで発達すれば、その個性は「自らの意志で、完全に意識的に、そして誰にも強いられることなく、万人のために自己のすべてを犠牲にする」ことができる、そしてそれこそが「意志の最高の自由」だと言うのである。この一見矛盾した主張が、「みずから進んで万人のために命を投げ出し」、「万人のために十字架に」赴いたキリストへの信仰に支えられていることは明らかである。しかしながら、ここでは彼のこの弁証法的立論の当否が問題なのではないし、またそれは問題にしようのないこともある。ここで問題にしなければならないのは、西欧的個性を全否定するのではなく、むしろその個性を更に高めることによって全体への自発的な犠牲を実現し、同胞愛的結合へと至る構図が、ピョートルによる西欧化を全否定するのではなく、その成果を保持しつつ教養階級が民衆の原理へと、ロシアの土壌へと回帰してヨーロッパとは異なるロシア独自の新しい生活に入るべきだという土壌派の基本的主張のヴァリエーションに他ならないということであり、したがって、「同胞愛」という口当たりの良い概念が、フランス革命

のスローガンからは遠く離れて、ロシアの民衆的原理、ロシアの土壌というイメージとの関わりにおいて論じられていると推測されることなのである。ピョートルに追随して西欧化を志した教養階級が、ひとたび身につけた西欧的個性を振り捨てるのではなく、むしろその個性を更に高めることによって自発的に自らを犠牲にし、ロシアの民衆的原理と一体化を図ることがドストエフスキイのいう「同胞愛」の実体だとすれば、それはきわめて排他的で危険なものと言わざるを得ない。それは西欧のどこかではなくロシアでのみ実現し得るものであり、帰属する共同体への狂信的な自己犠牲をも西欧的理性という衣で覆うことができるからである。

1873年の「作家の日記」で、自らの民衆体験を「不幸を共にする中での民衆との同胞的な一体化」とドストエフスキイが表現した時、それはもはや、彼が読み書きを教えたチェルケス人や、彼が与えた僅かの金銭ゆえに別れを惜しんで泣いてくれた囚人たちとの、暖かい、親しみのこもった睦まじい交流を回顧的に意味していただけない。それはロシア社会の未来に向けた強固なイデオロギーとして、ひとたび民衆から離反した「個性」がロシアの土壌へ、普遍性を欠いた民族主義的な民衆的原理へと自発的に回帰し、排他的な同胞愛の中で「個性」を溶解させることをも示唆しているのである。ドストエフスキイ個人の経験のレベルでは、民衆と共にした「不幸」とは徒刑であった。それではロシアが今直面し、それゆえに教養階級の「民衆との同胞的な一体化」が要求されている「不幸」とは何か。

### 3. 正教と同胞愛

オスマン・トルコ帝国の弱体化と、その支配下にあったバルカン半島諸民族の民族意識の高まりによって19世紀初頭から断続的に燻り続けていたいわゆる「東方問題」は、1875年のボスニア＝ヘルツェゴヴィナ反乱、1876年のブルガリア反乱によって新しい局面を迎え、ついには翌1877年の露土戦争開戦に至る。この戦争のヨーロッパ史、トルコ史における全般的意義についてここで検討することはできないが、ドストエフスキイに関して言えば、この戦争は、異教徒によって抑圧されるスラヴ人正教徒を解放するための、いわば新たな十字軍ともいえる性格を持っていた。わけても老人や婦女子を含め

たブルガリアの非戦闘員に対するトルコの傭兵の殺戮行為は、トルコとの戦争を支持する彼の論調の炎に油を注いだといえる。すでに「市民」誌の間借りという形ではなく、個人雑誌としての「作家の日記」で独自の言論活動を開始していたドストエフスキイは、迫害される正教徒スラヴの民を擁護し、帝国ロシアの動きを牽制する列強の動きを批判するオピニオン・リーダーとして終始した。そして、スラヴ民族の団結、世界史におけるスラヴ民族の役割、といった、小説作品の緻密さとは比べ物にならない粗雑な議論の中で、ドストエフスキイがしばしば頼るのが「同胞愛」( ) という概念なのである。ここではそのすべてを網羅することはできないが、この時期の彼の思考を端的に示している例として、1876年12月の「作家の日記」の一節を挙げておく。「問題は今やいかなる点に存するか」と題されたこの文章で、ドストエフスキイは、東方問題と称されるトルコとの軋轢の本質がスラヴ民族の団結や政治的利害等にあるのではないと言う。

( . . . ) なぜならこの問題全体の主たる本質は、民衆 ( ) の理解するところによれば、疑いもなく、完全に、東方キリスト教の、すなわち正教の運命にのみ存するからである。わが国の民衆はセルビア人もブルガリア人も知らない。民衆がなげなしの金を出したり義勇兵になったりして援助するのは、スラヴ人のためでもスラヴ主義のためでもない。彼らはただ、正教徒が、われらの同胞が、キリストへの信仰ゆえにトルコ人から、「神なきサラセン人」から苦しめられているということを耳にただけなのである。それゆえにこそ、ただただそれだけの理由で今年民衆はあのような動きを示したのである。正教のキリスト教の真の運命、未来の運命 ここにこそロシア民衆の理念のすべてがある。ここにこそキリストへの奉仕とキリストのための勲しへの渴望がある。この渴望は偽りのない、偉大なもので、わが国の民衆の中に古代より止むことのなかったものである。恐らく決して消えることのないものである。そしてこれこそがわが国の民衆とわが国の性格付けで最も重要な事実なのである。( . . . ) <24 - 61>

ここで再びドストエフスキは < > を引き合いに出している。戦争の経済的な側面、政治的な側面を、彼は敢えて見ようとしな。イスラム教徒によって抑圧されているスラヴ人正教徒の苦難を耳にしたロシア民衆の犠牲的行為のみが彼に靈感を与え、この戦争に「キリストへの奉仕」という意義を認めさせる。キリストに奉仕し、キリストのための勲しを積むことが、歴史的事実を全く無視した形で「わが国の民衆の中に古代より止むことのなかった」渴望として喧伝され、それは民衆のみならずロシアという「国」( ) の志向でもであるとされる。ドストエフスキにとっての真の宗教、正教の運命はロシアの未来と同一視され、ロシアは正教と正教を奉じるすべてのスラヴ民族の保護者として振る舞うことを期待される。他でもない。「民衆」の名において、である<sup>7</sup>。

(・・・) 全ロシアはキリストに奉仕し、全世界的正教のすべてを背信者たちから守るといふそのことのためにのみ生きているのだという考えさえもが、疑いもなく、民衆のうちに形成され、強まったのである。この考えを民衆の誰もがあからさまに口には出さないとしても、それでも民衆のうちかなり多くの人がそのうちはっきりと意識してこの考えを口にするであろうということ、そして、この極めて多くの人々が残りの民衆に対して疑問の余地ない影響力を持っているということを私は断言する。したがって、この考えはすでにわが国の民衆全体の中でほとんど意識的なものとなっており、民衆の感情の中に秘められているなどというものではないと言ってもよいだろう。それゆえ、ただ唯一この意味においてのみ東方問題はロシアの民衆に理解できるものなのだ。これこそが重要な事実なのである。(・・・) < 24 - 62 >

それゆえ、東方問題からロシアはもはや手を引くことが出来ない。仮に諸般の事情から手を引かざるを得ないことがあったとしても、

(・・・) それでもやはり全体としてこの問題は、ロシア民衆の生

活そのものの本質として、いつかは必ずその譲ることの出来ないほどに重要な目的、すなわちキリストと同胞愛（ ）におけるすべての正教徒民族の一体化（ ） それもはやスラヴ人と爾余の民族の区別など無い一体化という目的を達成しなければならない。この一体化はもしかすると政治的なものですらないかも知れない。狭義での本来のスラヴ問題、狭義での政治的問題（つまり海域とか海峡とかコンスタンチノーブル等々といったことども）は、その時にはもちろん、主要で基本的な課題の解決に最も矛盾しない形で解決されるだろう。（・・・）<24 - 62 - 63>

『冬に記す夏の印象』の中でドストエフスキが「同胞愛」にまつわる逸脱を始めたのは、フランス革命の三つのスローガンとしての「同胞愛」（fraternité）への言及がきっかけであった。しかしながら、たとえば森安達也が詳細に述べているように<sup>8</sup>、フランス革命が後のロシア革命に匹敵するほどの壮大な「非キリスト教化」の実験としての側面を持っていたにも拘らず、そのスローガンのひとつであった「同胞愛」が元来は優れてキリスト教的な概念であったことを想起しなければならない。すべての人間が兄弟姉妹であるという発想は、万人が神の子であるという前提の上に成り立つものであり、通常よく行なわれているように <fraternité> を「博愛」という意味で捉えるためには、人類全体を息子または娘とし得る唯一共通の神（価値）が存在しなければならない。ドストエフスキが用いる「同胞愛」（ ）という語が、これまで見てきたように、ロシアの民衆的原理、あるいはロシアの土壌といった概念と結びついて一定の排他性を帯びるとすれば、宗教的にはこの排他性はキリスト教の、特にロシア正教の排他性として現れる。事実、ドストエフスキは自分の主張が政治的なものとして受け止められることを極力避けようとしている。ロシアがバルカン半島に乗り出すのは、また、コンスタンチノーブルを窺うのは、政治的利害のためでも、汎スラヴ主義のためでもない。「キリストと同胞愛におけるすべての正教徒民族の一体化」を実現するためなのである。今や正教のキリストと同胞愛は同一視され、その中で「一体化」するのはすでにロシアの民衆と教養階級だけではない。信

仰を同じくするすべての民族が、この一見物分りの良さそうな、しかし実は極めて排他的な概念の中に「一体化」するのである。

キリストにおける、そして同胞愛における正教徒諸民族の一体化を主張しながら、ドストエフスキイが「スラヴ人と爾余の民族の区別など無い」と言い添えていることにも注意を向ける必要がある。晩年のいわゆる「プーシキン講演」で最高潮に達した、ロシアこそが世界史の中心となるかのごとき主張の反映が、ここには見られるからである。しかしここでは、プーシキンの作品解釈に踏み込まざるを得なくなる「プーシキン講演」にまで議論を拓けることはせずに、同じ「作家の日記」の中から、「同胞愛」という概念に依拠しつつ、ドストエフスキイがユダヤ人について語った文章を挙げるにとどめておく。1877年3月「作家の日記」第2章は、自分はユダヤ人を憎悪していないという釈明で始まる論評であるが、一読すれば、やはりドストエフスキイはユダヤ民族を侮蔑し、憎んでいると結論せざるを得ない奇妙な、ある意味では底意地の悪い文章である。しかしここで問題にすべきはそのような底意地の悪さではなく、この論評の最後に見られる次のような文章なのである。

(・・・)もしも彼ら(ユダヤ人 松本)の尊大さが、ユダヤ人のロシア民族に対する常に変わらぬ「悲しみに満ちた嫌悪感」がただの偏見であり、「歴史的腫瘍」であって、その律法や思考様式のはるかに深い秘密の内に潜んでいるのでなければ、それならばこういったことはすべて吹き飛んでしまい、われわれは心を一につにし、同胞愛の内に、相互援助とわれわれの大地、われわれの国家と祖国に奉仕する偉大な事業に向けてひとつになることができるであろう!(・・・)ロシアの民衆のことなら請合っている。ああ、信仰の相違にも拘らず、彼らはユダヤ人を自分たちとの欠くところなき同胞愛の内に受け入れるであろう。そしてこの相違の歴史的事実に対して満腔の敬意を抱きながらも、それでも同胞愛のためには、欠くところなき同胞愛のためには、双方からの同胞愛が必要なのである。たとえ幾分かでも、ユダヤ人の方からロシアの民衆に同胞的感情を披瀝してロシア民衆を

元氣付けてくださるように。 < 25 - 87、圈点部分は原文でイタリック >

これまで見てきたドストエフスキイにおける「同胞愛」という語の用法を考えるならば、ここでドストエフスキイの提起していることが、ロシア人とユダヤ人の対等な歩み寄りなどではないということは明らかであろう。「信仰の相違にも拘らず」、ドストエフスキイがユダヤ人に呼びかける「同胞愛」はロシアの民衆的原理に根ざしたものであり、正教のキリストへの奉仕を旨としたものであり、そして「われわれの国家と祖国に奉仕する偉大な事業」に向けたものなのである。信仰の相違には敬意を表する、が、「同胞愛」のためには「双方からの同胞愛が必要なのである」というトートロジーにも似た結論の代わりに、『冬に記す夏の印象』でドストエフスキイが説いていた言葉を想起して当て嵌めてみることもあながち誤りではあるまい。すなわち、「真の同胞愛においては」、「反逆し要求する個人が何よりもまず自分の我のすべてを社会への犠牲にしつつ、自己の権利を要求したりなどしないばかりか、逆にそのような権利を全く無条件に社会に差し出さねばならない」という言葉で、である。

先にも述べたように、ドストエフスキイは小説作品の中では「同胞愛」という語をほとんど使用しなかった。唯一の例外は、「作家の日記」におけるアジテーターとしての役割にひとまずきりをつけた後に執筆された『カラマーゾフの兄弟』第2部におけるゾシマ長老の説教での使用である。愛弟子アリョーシャ・カラマーゾフに大地への愛を説いたこの長老の宗教思想が、狭隘な民族主義や汎スラヴ主義とどのように折り合っていくのか、これは稿を改めて論じるべき問題であろう。(2003. 9. 26.)

## 注

1 ドストエフスキイからの引用はすべて . . . . .

30- , ,1972-1990.によるものとし、煩雑を避けるために本文では< >内に巻数と頁数のみ示した。

2 < 6 - 418 ~ 419 >

3 いわゆるロシアの「西欧化」がピョートル大帝の治世に始まったという定説については、現在ではすでに異論が出ている。たとえばマルク・ラエフは、その著書『ロシア史を読む』（原題はComprendre l'ancien régime russe、石井規衛訳、名古屋大学出版会、2001年）において、すでに17世紀のモスクワ大公国時代において「ツァーリの身体的な隔離、首都の日常生活と宮廷との間の接触の欠如などは、ルイ十四世治下のヴェルサイユとパリの間よりはるかに大きな隔絶状態をもたらし」（5頁）であり、また「古儀式派の分裂、社会的・経済的紛争、西洋からの文化的伝来」とりわけキーエフを経由した伝来、それらを通じて、世俗のエリートや教会エリートは、モスクワ大公国的な伝統を、非常に急速に、だが段階的に放棄していった」（20頁）と指摘した上で、「スラヴ派的な神話のみが、ピョートル大帝以前のモスクワ大公国における亀裂を否認していたのである」とまで言い切っている。しかしながら、本論では、ドストエフスキ自身の理解に則り、また、西欧化の象徴としてのピョートル大帝のイメージにそのまま依拠して論を進めることとする。

4 < 18 - 35 ~ 39 >

5 ヴラヂーミル・ダーリの『ロシア語注解辞典』では、< >の語義として「兄弟関係、程度や軽重を異なえる兄弟関係の状態」の他に「親近性、友情、友好関係、親しい関係」を挙げている（

, , 1956）が、以下本論では後に出てくる革命のスローガンとしてのフランス語< fraternité >との関わりで「同胞愛」と訳すことにする。

6 太字圏点付きで示した「我」は本文では大文字イタリックで示されている。

7 . . . . .ポポフは「ドストエフスキにおける民衆の問題」と題した論考（ . . . . .

, .4, , 1980, .41 - 54.）において、ドストエフスキの世界観をロシアの農村共同体に関連付け、「共同体的集団主義からドストエフスキは、ロシア農民の世界観の最も重要な特徴として同胞愛の理念を引き出した」という . . . . .フリドリエンゲルの意見に依拠している。ドストエフスキの共同体に対する興味を浮かび上げようとするポポフの手法には疑義が残るとはいえ、「同胞愛」の概念の形成に、ロシア農村共同体の理想と現実がどのような影響を及ぼしたかという問題は極めて興味深い。しかしながら、「同胞愛」という概念がその内実の多くを農村共同体に負っているのだとすれば、「帝政幻想」を生んだ共同体的民主主義の悲劇的な運命を明瞭に理解することもなく、民衆を社会道徳の最高の審議機関であると主張する試みや、そのような幻想を無批判に受け入れたことが、数知れぬ悔しい保守的迷妄へとドストエフスキを導いたの



である」というポポフの結論は、むしろその意図するところとは逆に、民主主義一般の陥りやすい陥穽の存在を示唆しているとも言えよう。

8 森安達也『近代国家とキリスト教』（平凡社、2002年）129 - 177頁。

本稿は2002年度同志社大学学術奨励研究「両大戦間ドイツにおけるゲルマンとスラヴの文化接触」の成果の一部である。（共同研究者：諫早勇一、高木繁光、山本雅昭）

<< >>

1854

<< >>

<< >>

:

—

<< >>, << >>, << >>

>>.

<< >> 1873

<<

,

》

《 》、  
》

、 《

170

— 《  
》。

《 》

« » 1873 :

« ,  
»,

« » -

1870-

« »(1863)

« », , ,

— « ».

« », ,

, —«

».

— « »

« »

(1877-1878)

